

Title	桃の傳説
Author(s)	小南, 一郎
Citation	東方學報 (2000), 72: 49-77
Issue Date	2000-03-31
URL	<a href="http://dx.doi.org/10.14989/66833">http://dx.doi.org/10.14989/66833</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## 桃の傳説

小 南 一 郎

### はじめに

中國の傳統的な文化において、吉祥・祥瑞という觀念は、相當に大きな位置を占めていたと言えるだろう。祥瑞は、單に人々の日常生活の中で、めでたく、あらまほしいものとして希求されるのみならず、例えばいくつかの正史に符瑞志といった篇が立てられているように、國家の政治の中においても、大きな意味と作用とを備えていたのであった。<sup>(1)</sup>こうした觀念が、後漢時代にすでに集大成され、一つの體系を備えたものとなっていたであろうことは、後漢中期ごろに建てられた、山東省嘉祥縣の武氏祠堂に畫かれた一連の瑞祥圖からもうかがわれるところである。<sup>(2)</sup>

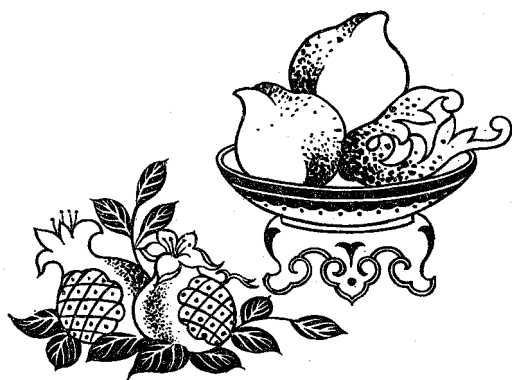
こうした長い歴史を持つ祥瑞の觀念は、なにに起源をし、どのような社會條件を基礎にして發展して來たのであろう。もちろん祥瑞はさまざまな表れかたをしており、それぞれの祥瑞について、各個に複雑な歴史があったに違いない。ただ、それら多様な祥瑞現象に共通する要素として、おそらく中國における農耕の發祥時期にまで遡るであろう、生命力信仰とでも呼ぶべきものを抽出できるのではなからうか。祥瑞とされる現象や事物には、その背後に豊かな生命力の觀念が付隨

していた。逆に、不祥とされるものは、生命力の缺如態を象徵しており、他のものにも、生命力を吸い取ってしまうというかたちで、不吉な影響をあたえると考えられたと、ひとまず假定できそうなのである。

祥瑞はさまざまな表れかたをしている。めでたさが天文現象として表れる場合もあれば、また地上の現象として表明される場合もある。地上のものとして表明される場合にも、動物、植物、無生物などと多種多様なかたちを取って出現する。まれにしか起こらない天文現象や、地上のものでも、例えば比翼の鳥や連理の樹などといった、普通にはあり得ないものとして祥瑞が表明される場合には、そうした事物が祥瑞とされたことの理由や意味を理解することは、それほど困難ではないだろう。不思議な、超現実的な現象が、非日常的な幸運を象徵するものとして、觀念の上で連結することは、むしろ容易であったと推測されるのである。それゆえ、ここでは、そうした超常的な現象とは異なる、日常的なものの中に表明される祥瑞について考えてみたいと思う。異常な現象を通じて表明される祥瑞には、觀念的に考案された、政治的色あいの濃いものが多いのに對して、普通に存在する、超越性と結びつかない物品の上に表明される祥瑞のほうこそが、自然發生的なものであり、祥瑞の基盤にあった、古い時期にまでさかのぼるだろう、原始的な觀念が留められていると推測されるからである。

### 一 桃の節句

以上のような想定にもとづき、ここでは、古くから人々に親しい植物の一つであった桃を例に取り挙げて、その祥瑞としての意味を考えてみようと思う。桃は、古くよりめでたい植物だとされており、そうした觀念は現在にまで引き継がれている。たとえば、『中國傳統吉祥圖案』は、吉祥の一つの「三多」圖案の項目に、佛手柑と桃と石榴（ザクロ）とをひ



圖一 三多圖

とまとめにして擧げて、つぎのように説明をしている(圖一)。

佛手とは佛手柑を圖案化したもので、その果實には裂け目があつて、指のかたちをしている。全體のかたちは人の手のようで、佛の手だともされる。「佛の字が」福と音通であることから、圖案の中で多福の象徴とされる。桃は、長壽を寓意する。石榴は多子(種子が多い)である。これらのものを一組みにすると、多福、多壽、多子孫を象徴することになるのである。これは、民間に傳わる、家族の繁榮を願う吉祥文様なのである。

これら三種の果實を組み合わせた、三多(多福、多壽、多子)の祥瑞圖案の中でも、佛手柑が祥瑞とされるのは、佛の字が福と音通であるからだと説明されている。同様の、音通に由來する祥瑞は、その例が多い。たとえば、蝙蝠が吉祥として、年畫など民俗的な圖像の中にしばしば畫かれているのは、蝙蝠の蝠が福と音が通じるからである。鹿が祿(俸祿)の象徴だとされるのもまた、よく知られた例であらう。それに對し、石榴が祥瑞とされるのは、種子が多いという形態的な特徴に由來している。ただその場合にも、多子が、種子が多いことと子供が多いこととの双方を意味する、双關語(かけことば)となっているのである。

このように、佛手柑と石榴とが吉祥だとされることについては、その由來するところが解説されているのであるが、桃については、長壽を寓意するだけ述べられて、なぜ桃が長壽の象徴となるかについては、なにも説明されていない。現在の人にとって、桃と長壽の觀念とが強く結びついていることについて、わざわざ説明される必要もない、自明なことだからであらう。以下には、その自明とされている、桃と長壽の觀念との結びつきについて、その由來するところを、時代をさかの

ぼって、考えてみようと思う。

日本において、三月三日の節句（ひなの節句）を、いつごろから桃の節句と呼ぶようになったのかについて、まだ詳しくは追求していない<sup>(4)</sup>。普通には、桃の花の咲く時節の行事であり、桃の花を飾って雛祭りをするので、桃の節句と呼び習わされていると理解されているのであろう。花が咲いた桃の枝を山へ採りにゆく習わしが傳わる地方もあるという<sup>(5)</sup>。

中國では、三月三日は、西王母を主神として祀る蟠桃會<sup>ばんとうえ</sup>の祭日である。中國の蟠桃會が、そのまま日本に導入されて、桃の節句となったというような、急いだ結論を付けてはならないであろうが、兩者の間になんらかの關係があったのかどうかについては、検討してみるに値する課題である。

古くより、西王母という女神が桃と密接な關係を持つとされていたことは、魏晉南北朝期に成立した「漢武故事」や「漢武帝内傳」などの小説作品の中で、西王母がもたらした、三千年に一度だけ實を結ぶ仙桃を漢の武帝が食べるという筋書きがあることから知られる。また後漢時代末期ごろの青銅鏡の文様には、西王母の側に立つ侍女が桃を捧げている圖像も見られる<sup>(6)</sup>。ただ、西王母と桃との關係が、三月三日の蟠桃會<sup>(6)</sup>というかたちを取るようになるのは、中國近世の社會の中においてであったと推測される。

蟠桃會の祭禮行事については、日中戦争以前まで、北京の東城にあった道觀、蟠桃宮での祭禮のことが最もよく知られている。この蟠桃宮の神々のことや蟠桃會の盛んな様子については、「境内を埋める參詣客にまぎれこんで、日が暮れるまで廟會の實況を觀察した」とされる、澤田瑞穂教授の報告がある<sup>(7)</sup>。

北京の東便門（現在の建國門）内に位置した蟠桃宮は、正式の名稱は護國太平蟠桃宮と呼ばれ、王母娘娘（西王母）を主神とする道觀である。正門に掲げられていた額には、明の萬曆丙午（三十四年）所建、清の同治辛未（十年）の重修とあつ

たという。この蟠桃宮において、陰曆の三月朔日から三日の間に行なわれた蟠桃會については、「燕京歲時記」など、明清時期に書かれた北京の歲時記の中に、いくつか言及がある。たとえば、「帝京歲時紀勝」は、次のように述べている。

蟠桃宮は、東便門の内の、河橋の南に位置し、太平宮と呼ばれる。その境内には、金母（西王母）など神仙たちが祀られている。毎年、三月のついたちから三日までの間、みやこの人々は、酒を用意しお供をつれ、馬の轡を列べてここへ遊覽にやって来る。はるかに續く堤防の上で馬を驅けらせ、柳の生える岸邊で弓矢を射る。河の兩岸では杯のやり取りが行なわれ、酒に酔うと若草の上でうたた寝をする。

三月ついたちから三日までが、蟠桃宮への參詣の日時であると同時に、蟠桃宮の門前の、河の岸邊が、野に出て酒を酌み交わすなどの、春遊（春のピクニック）の場所であったことが記されている。これは清代の北京での年中行事の記録なのであるが、そうした都市における蟠桃會の行事にあっても、川べりの野原に出て行なう春遊としての性格が失なわれていなかったことは興味深い。

人々が、この地上で行なう蟠桃會の行事は、西王母が天上で開催する蟠桃會に對應するものであった。西王母の蟠桃會のことは、明清の通俗小説の中にしばしば見えている。そうした中でも特によく知られているのは、「西遊記」第五回、孫悟空が天上の蟠桃會をめちやくちやにしてしまう場面である。現行「西遊記」の源流の一つとなった、南宋にまでさかのぼる出版だともされる「大唐三藏取經詩話」の第十一「回」に、すでに西王母の蟠桃のことが見えている。

猴行者が云った、「お師匠さま、まずはまいりましょう。ここから五十里を行けば西王母池なのです」。法師が云った、「おまえは行ったことがあるのか」。行者が云った、「わたしは八百歳のとき、ここへやって来て、桃を盗んで食べたことがあります。それ以来、二萬七千歳になりますが、ずっとご無沙汰しています」。法師が云った、「ちょうどいま、蟠桃が實っていて、いくつかを盗んで食べられたらよいのだが」。猴行者が云った、「わたしは、八百歳のとき、

十個を盗んで食べたがために、王母につかまり、右の脇腹に八百、左の脇腹に三千の鐵棒の刑を食らって、花果山の紫雲洞に流されました。今でも脇腹が痛みます。盗んで食べようなどという氣は毛頭ありません」。

ここでは、法師（玄奘三藏）の方が蟠桃を盗んで食べようとそそのかしているのに對し、猴行者（孫悟空の前身）は、以前のことであって、蟠桃はもうこりごりだと答えている。

これら「西遊記」關係の小説の中では、西王母と蟠桃とが結びつけて語られてはいるが、西王母が開催する蟠桃會が三月三日という日付けであったとする言明はない。三月三日が西王母の誕生日で、その日に蟠桃會が開かれるとするのは、寶卷に反映するような、明清時期の民間信仰の中で育った觀念なのであろうか。たとえば、「護國威靈西王母寶卷」には、西王母の來歴を説いたあとに、「三月三日の王母の誕辰の蟠桃會に群仙が參集し、王母は次々に孔子・老子・如來に封號を與え、また九曜・月下老人・五海龍王・玉兔・金鷄・年月日時四值功曹・天地人三曹・地藏菩薩などに、それぞれ名號を與えて職務と地位とを定めた。あるいはまた酆都城をうち開いて八萬四千の生靈を放ち、天宮に歸って再び蟠桃大會を開く。このときまた如來・夫子・老君の三教を會してその功を賞」するといった筋書きが展開するといふ。<sup>10</sup>

## 二 上 巳

三月三日の行事の原型となったのは、上巳<sup>じようし</sup>の儀禮であつた。上巳の行事は、魏晉時代に、三月上旬の巳<sup>み</sup>の日から、三月三日へと日時の設定が變化したとされる。<sup>11</sup>端午<sup>うづま</sup>の午の日の節句が五月五日の行事ということになるのも、ほぼ同時期であつて、そうした日時の設定の變化は、古代的な季節の祭禮が、現在につながるような年中行事として再組織化されることと對應していたと推測されるのである。そうした季節の行事の再組織化は、基礎にあつた生活共同體の性格の變化に對應

したものであったに違いないのであるが、その詳しいメカニズムは、まだ十分に解明されてはいない。

漢代の記録に見える、上巳の行事の中心は、水邊で行なうお祓いであった。「續漢書」禮儀志上には、次のように云っている。

この月（三月）の上巳の日には、官も民もあけて、東に流れる川のほとりで禊ぎを行なう。これを「洗濯」という。古い汚れや病氣を祓い去って、全面的な清めを行なうのである。

上巳の禊ぎは、前漢の都 長安の場合には、東郊の灊水のほとりで行なわれることが多かった。こうした、春の終わりの月に行なわれる禊ぎが、民衆的な祭禮であるに止まらず、支配階層をもまきこんで行なわれる行事であったことは、たとえば「史記」外戚世家の、漢の武帝と衛皇后にまつわる、次のようなエピソードからもうかがわれよう。

衛皇后は、字を子夫といった。……武帝には、即位したあと、數年にわたって子供が産まれなかった。「そのことを心配した、武帝の姉の」平陽公主は、良家の子女十數人を探してくると、着飾らせ、自分の家に住まわせた。武帝が灊水で禊ぎを行なったあと、歸り道に平陽公主のもとを訪れると、平陽公主は、自分のもとに侍らせていた美人たちを目通りさせた。「しかし」武帝は、心を引かれた様子を見せなかった。酒が出されると、歌い手たちが御前に出た。武帝は、歌い手たちを見やうと、衛子夫ひとりに心が動いた。この日、武帝が手洗いに立つと、衛子夫がその世話をし、便所で幸いを得た。

武帝は、姉が用意をしていた、良家の子女たちには見向きもせず、歌姫が氣に入って、皇后にしたというエピソードなのであるが、それが灊水での禊ぎの歸り道のことであったとされていることには、民俗的な意味があったと考えられる。この上巳の禊ぎの行事が、上にも述べたように、魏晉南北朝のころから、三月三日の行事へと變化する。日時の設定の變化は、行事自體の性格の變化とも對應しており、季節のめぐりの中で、必ず行なわねばならない宗教的な性格の行事か



ら、行樂の行事へと基本的な性格が轉換するのである。「荊楚歲時記」は、南北朝時期の、長江中流域での年中行事を記述した中で、次のようにいつている。<sup>(14)</sup>

三月三日には、すべての階層の人々が、そろって川や池など水邊に出ると、清らかな流れに臨んで、杯を浮かべて曲水の宴をもよおす。

この時期には、もう禊ぎという要素は強調されなくなっているが、しかし三月三日の行事が水邊で行なわれるという元來の性格は、曲水の宴というかたちで承け伝えられていたのである。王羲之の「蘭亭序」<sup>(15)</sup>も、

永和八年、癸丑の歲、暮春（三月）の初め、人々は、會稽郡山陰縣の蘭亭に集って、禊ぎをおこなった。という言葉で始まり、實際には、人々は酒を飲み、詩を作ったのであった。

三月上巳の行事は、その源流を、「詩經」國風の中に描かれる、歌垣<sup>かがい</sup>の中にまでたどることができるとされる。「詩經」鄭風、溱洧<sup>しんわい</sup>の詩に付けられた、漢代の「薛君韓詩章句」には、次のように云っている。<sup>(16)</sup>

溱與洧、方洊洊兮 溱の川と洧の川とが、ちょうど蕩々と流れる時節

〔注〕 洊洊は、盛んな様子である。三月の桃花水が流れ下る時期に、水の勢いがきわめて大きくなることをいう。  
惟士與女、方秉蘭兮 若者とむすめとは、蘭を手を持つ

〔注〕 秉は執の意味である。蘭は蘭のことである。この水の流れが盛んな時期に、若者たちとむすめたちとは、蘭を手執って、悪いものを祓い除ける。鄭の國の風俗では、三月上巳の日に、この溱水と洧水とのほとりにおいて、招魂續魄（たまふり）を行ない、蘭草を手にとって、不祥を拂い除いた。それゆえ、詩の作者は、戀人といっしょに行つて、その様子を見たいと願ったのである。

「詩經」溱洧の詩は、鄭の都の郊外で合流する、溱水と洧水とのほとりで、若い男女が、蘭を送りあい、川を渡ったかなたの草原で愛を交わすという、春の歌垣の行事を描寫している。それが上巳の日の行事だとするのは、漢代の注釋家の見解であつて、詩經國風の諸作品が形成された時代に、果たしてそうした日取りであつたかどうかは確かめられない。しかし、日取りのことは重要でなく、人々が、春の野に出て、水邊で行なつた歌垣と、上巳の儀禮、下つては三月三日の行事との間に密接な關係があつたことが確認できればよいのである。

「韓詩章句」は、春の時期に水かさを増した流れが、桃花水と呼ばれたと言っている。春の出水を桃花水と呼ぶことについては、「漢書」溝洫志などにも見えるところであつて、當時の一般的な呼稱であつたのだろう。それでは、なぜ、春の季節にみなぎり流れる水が桃花水と呼ばれたのであろう。おそらくは、桃の花が咲く時節に流れる水だから桃花水と名付けられたという單純な理由からではなかつたであらう。桃花水の桃花とは、後に述べる、天地を結ぶ桃の大樹に花が咲く、その花を、元來は意味していたと推測されるのである。地上の桃樹の開花は、そうした神話的な桃樹の開花に反應したものであつた。そうして、この時節に、神話的桃樹に由來する桃花水が流れておればこそ、その水で禳ぎを行ない、その水のほとりで招魂續魄の儀禮が行なわれ、また歌垣もくりひろげられたのであつた。結論を先に言つてしまふことにもなるが、この桃花水こそが、生命の水であつて、その生命の水を浴びることによつて不祥を除去し、たまふりを行ない、また歌垣というかたちを取つて、人間の多産と作物收穫の豊かさなどが希求されたのであつた。

晉の潘尼「三月三日洛水作」(遼欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』)の詩に云う

羽觴乘波進 鳥形の盃(耳杯)は波に乗って進み行き

素卵隨流歸 白い卵は流れとともに手元に到着した

この詩は、三月三日、洛水の岸邊での曲水の宴を詠つたものであるが、行事の中で、酒杯だけでなく、卵も水に浮かべ

られたらしいことが知られる。卵は生命力のエッセンスである。上巳の儀禮が、一方で、殷王朝の先祖が玄鳥（ツバメ）の卵を呑んだ母親から生まれたという、高祿信仰と結びついていることをも考えあわすべきであろう。そうした卵が、この日、水に浮かべられている。これも、生命力を伝える水という觀念を反映した行事であったに違いない。

次のような物語りも、三月三日の行事が生命力を得ることを目的としていたこと、その生命力が水を媒介にして人々に伝えられるとする、古くからの觀念を基礎にして語られたものであったろう。「搜神記」卷十六に見える盧充の話によれば、范陽の盧充は、それとは知らぬうちに、崔氏の墓の中に入り、崔氏の亡くなったむすめと結婚をする。墓中で三日を過ごしたあと、盧充は家に歸される。<sup>(18)</sup>

別れてから四年目、三月三日の日に、盧充は、水邊に出て遊んだ。ふと見ると、流れに乗って二臺の牛車が、ぶかぶか浮かんでいた。車は岸に近づき、盧充といっしょにいた者たちもそれを目にした。盧充が、車に近寄って、うしろの扉を開けると、崔氏のむすめと三歳の息子とが乗っていた。

崔氏のむすめは、その子供を盧充に手渡して、去って行く。これ以後、盧氏は繁榮し、後漢末の學者の盧植もその子孫なのだという、盧氏一族の先祖譚である。この中の、三月三日に子供が水に浮かんでやって来るという筋書きも、生命力、多産が水を介してもたらされるという、この日の儀禮の基礎的な性格を留めたものであったと考えられるのである。

以上に述べたような、上巳、三月三日の行事の本質についての推測に誤りがないとすれば、前に引いた、「史記」外戚世家に見えた衛皇后のエピソードの持つ意味も、より明確になって来るであろう。子供が生まれない漢の武帝は、瀾水で「生命の水」に浴して、生命力を身に付けたあと、衛皇后と交わった。こうした武帝の行爲は、溱洧の詩に描かれている、若い男女が水渡りをしたあとに交わることによって、子孫の多産を實現しようとした歌垣と、同様の民俗的觀念を基礎にした、儀禮的行爲なのであった。

### 三 魔除けの呪術

桃は、古い時代から最近まで、魔除けの力を持つ植物だとされて来た。たとえば、「春秋左氏傳」襄公二十九年には、次のようなエピソードが見え、桃には死のけがれを拂う力があるとされている。<sup>(19)</sup>

「魯の襄公が楚にあつたときのこと」、楚の國の人は、襄公に「死去して、<sup>もがり</sup>殯されている楚の康王に」衣服を贈る儀式をみずから行なわせようとした。襄公はそれをいやがった。穆祝が云つた、「殯をされている死者に對し、お祓いをしたあとで、衣服を捧げられるならば、普通の捧げものをされるのと變わりがありません」。そこで巫に命じて、桃と葦の箒とを用いて、まず殯されている死者に對し、お祓いをさせた。「思いもかけぬことで」楚の人々は、お祓いをやめさせることができず、「襄公にそんなことをさせようとしたことを」後悔した。

襄公は、死者の側まで近寄るに先立って、桃と葦とで作った箒を用い、お祓いをすることによって、死のけがれの感染を避けようとしたのである。おそらく、桃の木材を握り棒とし、その先に葦の穂を付けた、ハタキのようなものでお祓いをしたのであろう。そうした呪術をあつかつていたのが巫であつたとされていることも興味深い。

桃と葦とを組み合わせたお祓いの道具のことについては、禮關係の書物に、いくつか言及がある。「禮記」檀弓篇下には、次のようにある。<sup>(20)</sup>

主君が臣下の葬儀に臨席する場合、巫祝が桃の枝と葦の箒とを手に取り、戈を握った者が従うのは、それを忌むからである。

この經文に付けた陳澧の注は、次のように説明を加える。

桃の本質として、惡を退ける力がある。鬼神は桃を畏れる。王莽は高廟（漢の高祖）の神が靈力を表わすことを忌避し、桃を煮たお湯をその廟の壁にふりかけた。菊は葦の箒である。けがれを掃き出すための道具である。巫は桃を手に取り、祝は葦の箒を手に取り、小臣は戈を手取る。忌避すべき凶邪の氣が存在するので、この三つのものによって祓い除けるのである。

あるいは、「周禮」夏官、戒右の役の職務規定にも、次のようにある。<sup>(21)</sup>

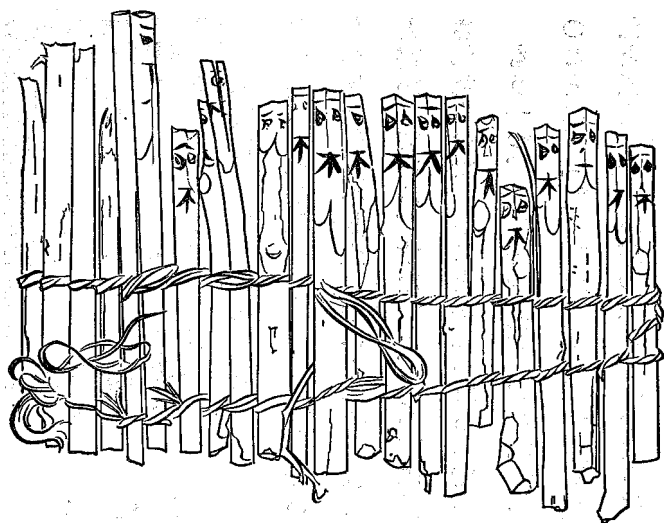
盟（會盟の場で、牛の血をすすって盟約をする）を行なうとき、戒右は、玉製の敦（まるい容器）を捧げ持ちつつ盟約の言葉が発したあと、「敦を手渡して」盟の行事に取りかからせる。牛の耳から血を取ることと、玉敦に入れたその血を桃と葦の箒で祓うことを、戒右が介添えする。

ここでは、盟約のため、みなが牛の血をすするに先立って、戒右が、その血を桃と葦とで祓って、邪惡なものを祓い除き、神聖化するとされている。

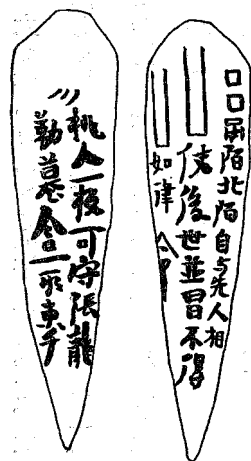
桃によって祓い除けられるのは、元來は邪惡な氣やけがれと意識されていたのであるが、上に引用した「禮記」檀弓篇の陳澧注にも見えたように、漢代のころになると、それが形象化され、鬼神（特に鬼）だと理解されるようになっていた。そうした鬼と桃とが敵對するという觀念は、すでに戰國末期のころに存在していたことが確かめられる。雲夢睡虎地出土の秦簡「日書」甲篇の詁答篇に、次のようないふことが見えるのである。<sup>(22)</sup>

人間の方に特に理由もないのに、鬼から惡さをされて、それが止まないのは、厲鬼であって、桃の木で弓を作り、茨の棘（くさき）をやじりとし、鶏の羽を矢羽として、鬼が現われたとき、射かけると、鬼の出現は止む。

鬼が桃を畏れるという觀念は、後世に引き繼がれ、そうした觀念を基礎にして、さまざまな習俗が生み出されている。「藝文類聚」卷八十六が引用する「本草經」には、次のようにある。<sup>(23)</sup>



圖二 馬王堆漢墓出土桃木偶



圖三 アスターナ出土桃人

梟桃が樹に止まって落ちないとき、それは全ての鬼を殺す。

梟桃とは、收穫が終わったあと、樹の上に一つだけ遺された桃の實のことであろう。日本にも、そうした果實を木守りの神と呼び、今年の多産を來年につなぐものとして大切にする風習がある。おそらく同様に生命力をつなぐとされたのであろう梟桃には、鬼を殺す力があるとされていたのである。

桃の木を用いた呪術の實際の例のうち、最も古いものの一つとして、長沙馬王堆一號前漢墓からの出土物を舉げることができる(圖二)。この墓の發掘報告は、次のように記述している。<sup>(42)</sup>

馬王堆一號漢墓からは、合計三十六個の辟邪(魔除け)のための木偶(木製の人形)が出土しているが、そのうちの三十三個は、長さ八十二センチの桃の木材を用いたもので、すべて内棺の蓋板上の帛畫の右下方に置かれていた。そのうちの二十二個は麻繩で編まれており、それ以外の十一個は、ばらばらに置かれていた。これらの木の人形は、桃の枝を二つに割き、片側をブリズム狀に削って、その中央を鼻とし、兩側に墨で目を畫いたもので、それ以外の部分は削られておらず、それらのうちのいくつかは、桃の枝をそのまま加工もせず用いて、數をそろえている。



圖四 剛卯

墓の女主人の魂を天上に導くために用意された帛畫（飛衣）と並んで置かれた、この桃の木の人形にも、葬送儀禮の中で重要な働きがあったに違いない。墓主人の魂が、途中で惡鬼などの妨害を受けることなく、つつがなく昇天できることを祈って、この人形が置かれたものと推測できるだろう。

トルファン、アスターナの、六世紀ごろの墓地から出土した桃材を用いた木牌も、當時の人々がそれを「桃人」と呼んでいたことが知られる貴重な例である。この木牌は、長さが二十一センチの水滴形で、墓の頂上付近の封土の中にさし込まれていた。表面と背面ともに墨書があって、「桃人一枚、可守張龍勒墓舍一所……」と書かれている。すなわち、その墓に葬られているのは張龍勒という人物で、この「桃人」は、その墓を守るために用意されたものであることが知られるのである（圖三）<sup>(25)</sup>。

もう一つ、桃の持つ辟邪の力を利用したと考えられる考古學的遺物を挙げれば、剛卯と呼ばれる佩びものがある。剛卯のことは、「漢書」王莽傳に、政權を奪取した王莽が、劉氏の劉字（卯、金刀と分解される）に關係する「正月剛卯」を禁じた見え、その服虔の注に、次のように云う。<sup>(26)</sup>

剛卯は、正月の卯の日に作って、腰に佩びるものである。長さが三尺（寸か）、幅が一寸で、四角形、玉や金や桃の木で作られるものなどがあって、革帶にくっつけて、腰に佩びる。

同じく晉灼の注によれば、剛卯の上には疫病よけの文句が記されるという。

この正月に佩びる剛卯を、王莽が禁じたとあることは、逆に、こうした呪具を佩びる風習が廣く行なわれていたことがわける。玉や金で作ったものもあるとされているが、おそらく元來は、桃の木材で作られていたのが、華美になって、金玉製のものも出現したのだと想像されよう。この剛卯については、實物がいくつか遺っている。亳縣鳳凰臺一號漢

墓の出土品二件は、玉製で、高さ二・二センチ、はば一センチの、きわめて小さなものであるが、四面に文字があつて、天帝が祝融などの神に下した、疫病を退けさせる命令文が記されている（圖四<sup>27</sup>）。

こうした、桃の樹が備える、惡鬼を退けるという力を用いた呪術は、魏晉南北朝以後には、主として護符という形態で存続した。たとえば、「抱朴子」登涉篇には、<sup>28</sup>

上に擧げた五つの符は、みな老君入山符である。丹でもって桃の板の上に書き、その文字は板いっぱい大きく書かれる。これを入り口や四方、四隅、歩く道の要所要所に打ち付けておく。

とあつて、山中での危険を避けるための符（お札）は、桃板の上に朱書される。

もう少し物語り的な例を擧げれば、唐代の「朝野僉載」卷五には、次のような話し載っている。<sup>29</sup>

隋の時代、絳州夏縣の樹提家が、新しい家を建て、引越しようとしていたとき、突然、無數の蛇が現れ、室内から流れ出て、門外まであふれ出し、箔<sup>まがし</sup>の上の蠶のように、びっしりとあたりを覆った。そのとき、一人の旅人があつて、自分は符鎖（お札を用いた鎖めの術）に通じていると申し出た。その旅人は、桃の枝四本を用意すると、符を書き付け、家の周りの四方に釘で打ち付けた。「そうすると」蛇は、だんだん後退し、符も蛇のあとを追って移動した。蛇は、座敷に入っていたが、その座敷の中心には、盆ほどの大きさの一つの穴があつた。蛇がすべてその穴に入ってしまったと、熱湯百斗をそそぎ込ませた。一晚経って、鍬で掘ったところ、深さ一尺のところ、古い銅錢二十萬貫が見つかった。古い破損した錢を新錢に鑄なおして、大きな富を得た。蛇は、古い銅の精なのである。

この話では、古い銅錢が化して出現した蛇を鎮めるために、符を書いた桃の枝が家の四方に打ち付けられている。そうした符が、蛇を追って移動したとあるのは、單なる護符ではなく、恐らくなお、桃人や、次に述べる門神と共通する、



邪惡を鎮める人格的な神としての性格を留めていたのであろう。

時代が下るが、清の顧祿「清嘉錄」によれば、桃印を押した、簡略な護符があったという。<sup>(30)</sup>

天師符を貼ること。元旦に、人々は道院でもらった天師符をおもて座敷に貼って、邪氣を祓い、丁寧な拜禮をして香を焚く。六月の一日になると、それを燃やして天に返す。僧侶から符をもらう者もいるが、その場合には、紅紙、黄紙、白紙に韋陀（韋駄天）が凶を鎮めている様子を畫いたものが多い。そうした圖柄からいって、天師符とは別のものである。貧乏人の家では、多く五色の桃印綵符を貼る。その符には、それぞれ姜太公、財神、聚寶盆、搖錢樹などが畫かれている。符をもらった者は、必ず寺院や道觀に行つて香を焚き、お禮の金錢を納める。これを符金という。ここに桃印とあるのが、どのような字様のものであったか知られないが、その材質は、もう桃材ではなく、また木材でもなく、紙に畫かれた圖に桃印と稱するしるしが押されただけなのであろう。

こうした桃の木に書かれる符の傳承を受け繼いで、年の初めに門口に桃符を貼るという風習は、現在にまで傳わっている。ただその場合、桃符と呼ばれてはいても、必ずしも桃材を用いるわけではない。たとえば婁子匡『新年風俗志』には、安徽省壽春の風俗を記して、次のように云う。<sup>(31)</sup>

正月一日の日、鶏が鳴くとすぐ、人々はそろって起きだし、頭に櫛を入れ、洗面をしたあと、香を焚いて天地と家の神を拜し、爆竹を鳴らし、家の門の傍らに桃符をさし込む。これは、惡鬼を追い拂う風習なのである。

こうした風習も、年中行事として、人々の生活の中に廣く根付いたのは、後漢時代から魏晉南北朝へかけての時期においてであったと推測される。「荆楚歲時記」には、次のようにある。<sup>(32)</sup>

正月の一日、桃板を作つて門口に貼りつける。これを仙木と呼ぶ。その桃板の上には二人の神の姿を畫いて、門口の左右に貼りつける。左が神荼しんたで、右が鬱壘うりであつて、人々は「この二神を」門を守る神だとしている。考えてみる

に、莊周（莊子）は次のように云っている、「鶏を門口にぶらさげ、その上に葦で編んだ繩を張り、その側に桃符をさし込んでおくと、すべての鬼は、それを畏れる」と。應劭の「風俗通義」が云う、「黃帝の書には次のように云っている、太古の時代、神荼と鬱壘（鬱律）という兄弟二人が、度朔山上の桃の樹の下に住んでおり、多くの鬼たちを取り締まり、みだりに人に迷惑をかける鬼がいると、葦の繩で縛って、捕らえて虎に食わせた、と。そうしたことで、「今の」お役所でも、十二月末の除夜には、桃の木の人形を飾り、葦で編んだ繩を垂らし、門口に虎を畫くのであるが、これは太古のできごとをまねしたものである」と。

ここに引用されているように、後漢末の應劭は、「風俗通義」祀典篇において、除夜に、役所の門に、桃の人形が飾られ、葦の繩が垂らされ、虎の繪を畫くといった風習があったことを書き留めている。しかもそれが、太古の時代の、度朔山（度朔山）に立つ神話的な桃の樹に由來する風習であったとしているのである。

#### 四 宇宙樹

桃には、邪氣や邪鬼を退ける力があるとされ、一方では生命力を授けるものともされる。桃が備えるこの二つの機能は、元來、別々のものであったのだろうか。わたしは、そうではなく、これらは一つの機能の兩側面であったと考えたいと思う。加えて、その元來の機能は、神話的傳承にまでさかのぼるものであったと想定するのである。

中國神話の中で、宇宙樹という觀念は相當に大きな働きを備えていた。扶桑樹や建木など、いくつもの宇宙樹をめぐる神話が、中國の古代文獻の中に留められており、蟠桃もまたそうした宇宙樹の一種なのであった。世界の果てに、大きな桃の樹が生えているという傳承は、中國のいくつかの文獻の中に留められている。「大戴禮記」五帝德篇には、次のように云う。<sup>(33)</sup>

顓頊は、龍に乗って「世界の果ての」四つの海をたずねた。北は幽陵に至り、南は交趾に至り、西は流沙を越え、東は蟠木に至ったのである。

世界の果ての四つの海のうち、東の海には蟠木があったとされる。その蟠木が桃であったと書かれてはいないが、蟠木という呼び方からしても、直接に蟠桃につながる、神話的な樹木であったことは確かであろう。

そうした世界の果てに立つ樹木の種類が桃であったと言明するのは、「山海經」の逸文である。「漢舊儀」は「山海經」を引用して、次のように云っている。<sup>34</sup>

「山海經」に云う、蒼海（東海）の中央に、度策と呼ばれる山がある。その山の上には大きな桃の木があって、三千里にわたって蟠屈している。その木の枝の、東北の隙間は、多くの鬼たちが出入りする場所である。この木の下には二人の神人がいる。その一人を神荼といい、もう一人を鬱壘という。かれらはすべての鬼を統括し、悪事と害をなす鬼は、捕らえて葦の縄で縛り、虎に食わせる。黃帝は、そこで、大きな桃の木で作った人形を門口に立て、神荼・鬱壘と虎、葦の縄との繪を畫いて、鬼の侵入を防ぐこととした。

東の大海の中央にある山の上に生える大きな桃の木は、三千里にわたって蟠屈し、おそらくその根がとぐろをまいたようになっているので、蟠桃と呼ばれるのだというのである。また、この桃の木の枝には、東北方向に隙間があって、そこだけから鬼が入ってこられる。東北が鬼の通り道であるので、鬼門と呼ばれるのである。また、この桃の木にいる二人の神の働きにちなんで、人間世界でも、神荼・鬱壘、葦の縄、虎を門戸に畫く風習が、黃帝によって始められたと説明されている。前に引用した「風俗通義」に見える、除夜に門口に桃の木の人形や葦の縄を配する習慣は、こうした神話を背後に持っていたのであった。なお、この桃が生える山がなぜ度策（度朔）と呼ばれたのかについて説明がないが、東海の神も度策君と呼ばれていることから、度索の語に古い來歴があったことが想像される。<sup>35</sup>

ちなみに、南北朝時代の志怪小説の一種、戴祚の「甄異傳」には、次のような物語りが載っている。<sup>(36)</sup>

譙郡の夏侯文規は、京口に住まううちに亡くなった。一年ののち、姿を現わして家に歸ってきた。……文規は、

庭の桃の樹を見て云った、「この桃は、わたしが昔、植えたもので、果實はなかなかおいしい」と。その妻が云った、「亡者は桃をこわがるともうしますのに、あなたはなぜ、こわがられぬのですか」と。答えた、「桃のうちでも、東南方向の枝が、太陽に向かって二尺八寸伸びているものを嫌がる。それもおそれぬ鬼もいる」と。

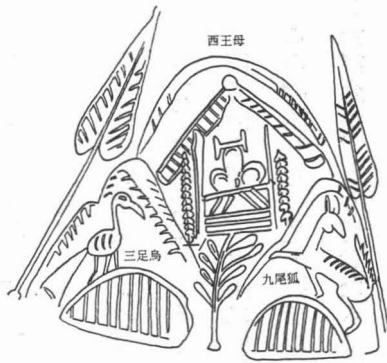
この物語りも、鬼・死者が桃をおそれるという傳承を基礎に語られているのだが、士大夫階層の人々にとっては、そうした觀念が、もう切實なものではなくなっていたことを示すのかも知れない。

南北朝時期に編纂された「玄中記」が描寫している桃都の樹も、同じ神話的な傳承に出るものであるに違いない。<sup>(37)</sup>

東南の方向の「世界の果てに」桃都山があり、その山の上には大きな樹木が生えていて、桃都と名付けられている。

「おそらく、九本の枝があつて」枝と枝との間は三千里、離れている。この木のでっぺんには天鷄がとまっています、太陽が顔を出して、この木を照らすと、天鷄が鳴く。「地上にいる」鶏たちは、みな、天鷄の聲のあとについて鳴くのである。この木の下には、二人の神がいる。左の神を隆といい、右の神を寔という。ともに葦の綱を手にとって、不祥の鬼を探し、捕まえると殺してしまふ。現在の人々が、正月一日に、二つの桃の人形を門の傍らに立て、雄の鶏の羽根を綱（注連繩）の眞中に置くのは、こうしたことになぞらえたものであらう。

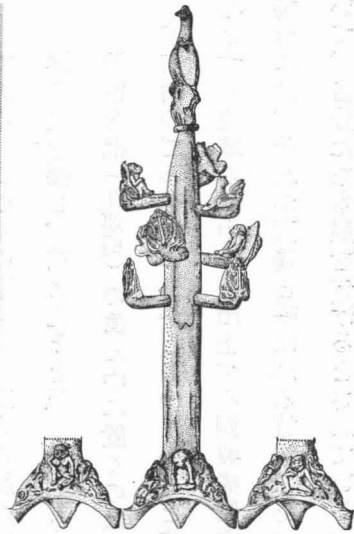
宇宙樹のでっぺんに鳥がとまっているとするのは、汎世界的な神話觀念であつて、<sup>(38)</sup> 中國でも、後漢後期ごろ、四川を中心とする地域の墓中から出土する銅製搖錢樹にも、鳳凰らしい華麗な鳥がその頂上にとまっている例が多い。桃都の樹の場合には、それが天鷄と呼ばれる雄鶏であつて、天鷄が日の出に反應して時を告げ、地上の鶏たちは、その天鷄の聲を聞いて、自分たちも晨を告げるとされているのである。



陶製桃都樹

圖五(右) 濟源出土

圖六(中央) 大阪市立東洋陶磁美術館所藏(左は、その脚部の圖像)



この桃都樹に比定されている、陶製の樹木模型が濟源泗澗溝の漢墓から出土している(圖五)。頂上に雄鶏がとまっているところからいって、これを桃都樹の模型だとする説は、ひとまず認めてよいのではないだろうか。<sup>(39)</sup> ほぼ同型の陶製模型は、大阪市立東洋陶磁美術館にも所藏されているが、こちらの方は、残念ながら、頂上の鶏が缺けている(圖六)。

濟源の桃都樹の模型には、頂上に鶏がいるほか、三本ずつ三段になって九本の枝が伸びており、その枝の先には桑のような葉が付いている。宇宙樹の九本の枝が九層の天を象徴するのも、シャマニズムの基本的な觀念の一つである。それぞれの枝の上には猿などの動物が坐っている。もしかすると、孫悟空(猴)と蟠桃との結びつきは、こうした神話的傳承にまでさかのぼるものであったのかも知れない。桃都樹の脚部は三つに分かれ、それぞれの面に異人風の人像がスタンプで表わされている。あるいは、神荼・鬱壘に關係のある神人であろうか。東洋陶磁美術館の桃都樹模型では、同じ位置に、勝(髪飾り)を戴き、几に據った西王母が表されている。西王母は、笠松のような標しを左右に立てた建物の中に坐り、その下には、三足鳥と九尾狐がいる。西王母と桃樹との密接な關係を示唆する、もっとも古い圖像の一つである(圖六左)。

こうした、桃の大樹を宇宙樹とする神話的傳承は、道教信仰の中にも流

れこんでいた。最も古い部分は東晉後半から劉宋にかけての時期の成立だとされる、「洞淵神呪經」卷一には、途方もなく大きな桃の木が見える。こうした超越的な數を臆面もなく付加するところが、民間傳承と異なる、宗教的傳承の特徴の一つなのであろう。<sup>(40)</sup>

玉京山の上には一本の桃の樹があつて、樹の高さは三百九億萬里。その樹の東の枝は東方を覆い、南の枝は南國の上にかぶさり、西の枝は西方の上を覆い、北の枝は北國の上にかぶさっている。四十九億萬年に一度、花が咲き、八十億萬年に一度、實を結ぶ。その實は、熟すると車輪ほどの大きさで、人がひとたびこれを食べると、三千年間、飢えることがない。鬼は、この桃の樹を見ると、自然と死んでしまう。天人たちは、それぞれにこの桃の木を手にとって地上に降り、疫病を運ぶ鬼や全ての厄いのもととなるものを殺すのである。

玉京山は、道教のパンテオンの中心に位置する山である。たとえば、「洞淵神呪經」とほぼ同じところに形成されたと推定される「元始上仙衆眞記」(いわゆる「葛洪枕中書」)には、次のような記述が見える。<sup>(41)</sup> 大昔のこと、陰陽未分化で、まだ天地も存在しなかったころ、すでに盤古眞人がいて、元始天王と名のついていた。やがて天地が分離すると、

元始天王は天の中心の上にいた。そこは玉京山と呼ばれ、その山中の宮殿は、すべて金玉で飾られていた。

とされる。この玉京山を中心にして、さまざま神々が生み出され、宇宙の秩序が確立されてゆくのである。ちなみに、民間傳承では大きな働きを持っていた、神荼・鬱壘のうち鬱壘だけが、「元始上仙衆眞記」のこのあとに續く部分で、東方の鬼帝蔡鬱壘という名で、桃丘山に役所を置いているとされている。

このように玉京山は、天の中心に位置し、そこを中心にして天地が秩序づけられたのであった。そこに立つ桃の樹が、神話的思考の中で、宇宙樹(世界樹)としての機能を備えていたことは、疑いのないところであらう。宇宙樹は、天地の中心に位置し、天と地とを結合する機能を備えている。元來、天上にしか存在しなかった貴重なものを、地上にもたらし

のも、天と地を貫通する宇宙樹の重要な役目である。蟠桃と呼ばれる宇宙樹を通じて地上にもたらされる、天上の貴重なものの第一が生命力なのであった。それゆえ、その蟠桃のミニアチュアである地上の桃の樹にも、生命力を授ける機能があるとされた。桃を長壽の象徴とする現在の觀念も、こうした神話的傳承までその源をたどることができるのである。

桃に不祥を祓う力があるとされ、のちには鬼は桃の樹を畏れるといった觀念が強くなり、そうした傳承に基づく呪術や習慣が廣く行なわれるのも、生命力信仰の反面であったと考えられる。不祥とは、生命力の缺如に由來するものであって、桃の木の持つ生命力を、そうした不祥なものに近づけることによって、生命力の缺如を中和し、さらには生命力のあふれるものに轉化しようとしたのが、桃を用いた呪術の背後にあった、民俗的な思考であつただろう。あふれる生命力で不祥を壓倒しようとしたのである。桃花水で禳ぎをするというのも、悪いものを水で洗い流すことを意圖した宗教實修のようにも見えるが、その根本は、水を通して生命力を身に付けようとするものであつたろうことは、前にも述べた。

よく知られているように、陶淵明には「桃花源記」という、寓意的な小品の文章がある。その前半分を引用すれば、次のように書かれている。<sup>(4)</sup>

晉の太元年間のこと、武陵の人で、魚を捕ることを仕事<sup>なりわい</sup>としてゐる者が、谷川に沿って遡ってゆくうちに、どこまで來たのか分からなくなつてしまつた。そうしたときに、思いがけなくも兩岸を來んで桃林が續くのに出會つた。數百歩の間、すべてが桃の木であつて、薰り高い花が鮮やかに咲き、舞い落ちる花びらは雨が降るようであつた。漁師はひどくびっくりし、さらに進んでその林がどこまで續くかを究めようとした。林がつきると水源であつて、そこには一つの山があつた。山には小さな入り口があつて、その奥にぼんやりと光が見えた。そこで船を捨てて、入り口から入つた。はじめは極くせまく、人ひとりがかやと通れるだけであつたが、さらに數十歩を進むと、ぽっかりと目の

前が開けた。……

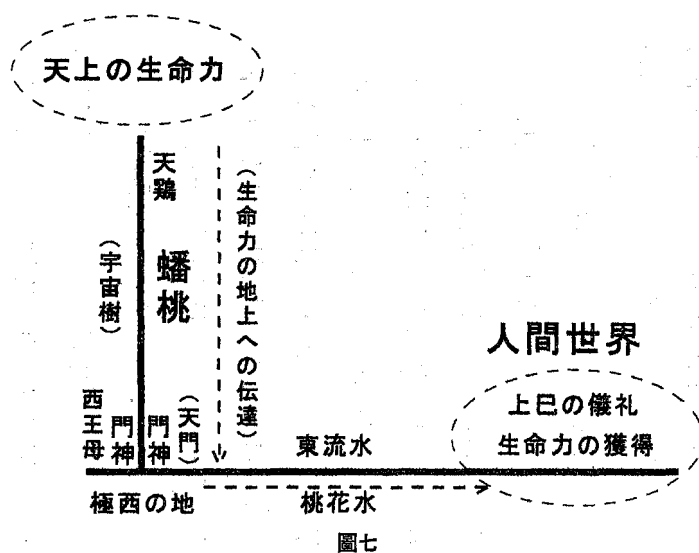
このようにして漁師は、隠れ里であり、一種の仙界である、自給自足的村落共同体に足を踏み入れた。そうした異界と現實世界との間をつなぐのが細いトンネルであることの意味については、すでにいくつかの議論がある。ここでは、桃林もまた、現世と異界との間に介在するものであったことを指摘してみたいと思う。

六朝時期に語られていた、劉晨と阮肇との二人が天台山中の仙女たちの世界を訪れるという物語りは、様々に語り變えられつつ、現在の民話の中にまで傳えられている。その原話ともいべきものを、「太平廣記」卷六一は「神仙記」として収めている。次のような物語りである。<sup>(43)</sup>

劉晨と阮肇とは天台山に入つて藥草を採っているうちに、遠くまで來てしまい、歸れなくなった。十三日がたつて飢えに迫られていたとき、遠くの山の上に桃の木があつて實が熟しているのが見えた。そこで険しい道を登り、蔓にすがつて桃の木の下までやつて來た。桃の實數個を食べると飢えは去り體力がもどつてきた。山を下りようとして、杯で水を汲んだところ、カブラの葉が流れ下ってくるのを見つけた。その葉はつやつやしたものであつた。さらに、杯が一つ、流れて來たが、それには胡麻飯が入つていた。そこで二人が語り合うには、ここは人家に近いのだ、と。そのまま進んで山を越えると、大きな谷川に出た。岸邊には二人の女性がいて、なかなかの美人であつた。女性たちは、二人が杯を手に行っているのを見つけると、笑つて云つた、「劉と阮との若君が、さっきの杯を拾つて來てくださった」。劉と阮とは驚いたが、二人の女性は、昔からの知り合いのようにうれしげな様子で、「なぜ、おいで下さるのがこんなに遅くなつたのでしょうか」と云つた。……

この物語りにおいても、仙界と人間世界との間には、桃の木と川の流れがあつたとされている。すなわち、現世と超越的世界との間を結ぶのは、宇宙樹としての桃の木であると同時に、水の流れでもあつたのである。いささか圖式的にはな





るが、次のようにまとめられよう。桃の木を介して天地は結合されているのであるが、その宇宙樹たる桃の樹は大地の果てに生えているとされ、そこから現世までの間を、水の流れが連結していたのである。

このように考えることによって、前に見た、桃花水が「生命の水」であったことの意味が、より明確になるであろう。天上にある生命力は、世界の果てに立つ、桃の樹を介して地上に伝えられる。この場合、桃の樹は、世界の西の果てに存在すると意識されていたのであろう。極東にあるとされていた蟠桃が西王母と結びついたのも、そうした意識の反映である。桃樹を通じて地上に到達した生命力を、極西の地から人間世界にまで運んで来るのは、東流する「桃花水」なのであった。東流する水が中国の様々な呪術の中で重視されるのは、天地の結合地点が極西の地にあるとする、中国の神話的地理観を基礎にしていたに違いない。そうした、天に由来し、水によって運ばれて来た生命力を身に付けるべく、人々は禊ぎを行なった

のであり、また歌垣に際して、水渡りがその行事の重要な一節をなすのも、それゆえであった。蟠桃が生えているそばに西王母池（瑤池）があるとされるのも、そうした水の機能と結びついた必然性があったのである（圖七）。

三月三日には、日本では桃の節句が祝われるが、中国南部の少数民族地域でも、この日に様々な行事が行なわれている。手っ取り早く、『歳時紀事辭典』の三月三の項目を見ると、この日の行事として九つの例が挙げられているが、そのうち

の六つまでが、中國南方の少數民族地域のものである。それを列挙して、簡単な説明を加えれば、次のようである。<sup>4)</sup>

(一) 海南島の黎族の傳統行事。舊曆の三月三日。談愛節(愛を語る節句)とも呼ばれる。青年男女たちが、對歌(歌垣)歡舞し、愛を語り、婚約を結ぶ。人々は集まって、山蘭(山地の陸稻)や狩獵の豐收を祈る。老人たちは、酒瓶を攜え、兄弟の家や鄰家を訪ねて、<sup>5)</sup>團結酒<sup>6)</sup>を飲む。またバンブーダンスなどが行なわれる。

(二) 雲南布依族の傳統行事。三月三節とも呼ばれる。家々では、花糯米の飯を炊いて親戚や友達を招待し、また一家が團樂をする。

(三) 廣西三江縣の侗族の民間祝日。花炮節とも呼ばれる。多くの人々が柳江の岸邊に集まり、青年たちは、空に打ち上げられた花炮鐵圈を奪い合う。

(四) 侗族の播種節・樓戲節。牛をいけにえにして先祖を祀り、五穀の豐作を祈る。各戸主は、自分の耕地に出て、象徴的な種まきを行なう。

(五) 壯族の傳統行事。五色のおこわを炊き、卵を赤く染めて、祖先を祭り、知り合いを招待する。

(六) 福建畬族の祖先祭祀の日。黒く染めたご飯で、祖先を祀る。

これ以外にも、湖南省の苗族は、舊曆の三月三日に<sup>7)</sup>動春節<sup>8)</sup>と呼ばれる行事を行ない、祖先神を祀って、豐作を祈願するとされる。また、壯族の三月三の行事は、劉三姐に始まるという傳説を持つ、盛大な歌合戦(歌圩)が開かれることで知られている。

もし、三日という日付けにこだわらないならば、關連する、より多くの祭禮行事を擧げることができる。たとえば、白族の<sup>9)</sup>桃花節<sup>10)</sup>は、三月の亥の日に行なわれる行事で、お供え物と桃花のついた枝數本とを持ち、耕地、山、樹木が茂る谷間などに行くと、白玉鬼、地鬼、山鬼、五穀鬼にお供えをして、年の終りには立派な收穫が得られますようにと祈る。

お供えが終わると、酒宴を開き、人々はみな歌舞に参加する。この節句が終わると、全村が農耕作業で忙しくなる。

これら中國南部の少数民族地域での三月三日の行事や桃の節句の行事に顯著であるのは、その年の農耕の豊作を祈る行事であり、祖先祭であり、歌垣を伴うといった要素である。しかし、水との関係については、ほとんど言及がない。それに對して、中原地域の漢族の儀禮において、水と接觸を持つことが不可欠な要素であったことについては、上巳の儀禮の分析の中で見てきたところである。北京の蟠桃宮の祭禮の場合にも、その門前の河の岸邊で酒を飲む人々が多かったのである。現在も行なわれている漢族の行事として、陝西省臨潼の例を挙げれば、三月三日は驪山老母（驪山の女神）の廟會の日であり、病氣にかからぬようにとお参りをする。また桃花節とも呼ばれて、人々は、驪山の温泉に入浴する。驪山の温泉は、楊貴妃が入浴したところとして知られているが、この行事が「洗桃花水」と呼ばれていることから知られるように、明らかに上巳における禊ぎの遺風であって、ここでも水との接觸が大切にされているのである。<sup>45)</sup>

この論文の最初に、日本の桃の節句と三月三日の蟠桃會との間に關係があったのかどうかという設問を出した。桃に魔よけの力があるとする觀念が、古くより日本にもあったことは、「古事記」が記す、イザナギの黄泉訪問の物語りからも知られる。イザナギは、追跡してくる女鬼たちを、黄泉平良坂よもつひらさかに生える桃の實をぶっつけて、退散させたのであった。もし、三月三日の行事について、漢族の儀禮と南方少数民族の儀禮との間の大きな差異が、水を重視するかしないかの違いにあると結論づけられるならば、日本における桃の節句は、水が大きな働きを示さない、南方少数民族地域の行事に近いものということになる。ただ、日本においても流し雛の習俗があり、あるいはまた、桃の節句とは結びついてはいないが、桃の實が水に流れてきて、赤ん坊がもたらされるという、桃太郎のおとぎ話しの構造は、むしろ中原における桃の傳承に近いものである。三月の儀禮について、中國南部の地域と日本との間にいかなる接觸があったのか、あるいはそうした接觸はなく、中原地域の儀禮が日本に傳わったのであるが、水に関わる部分が日本では必ずしも重視されなかっただ

けなのかなどの點の解明は、今後の探求に待たねばならない。

注

- (1) 「宋書」符瑞志序、劉知幾「史通」內篇、書志などを参照。
- (2) Edouard Chavannes, "Mission Archéologique dans la Chine Septentrionale", 1909, p. 48.
- (3) 李祖定編『中國傳統吉祥圖案』上海科學普及出版社、一九八九年
- (4) 『古事類苑』歲時部の擧げる資料によれば、「日本書紀」顯宗天皇元年(四八五)見える、上巳の曲水宴の記事が、日本における上巳の行事のもっとも古い記録のようである。この節句が桃花と結びつくのは、平安朝後半期のことであろうか。「宇多天皇御記」(増補史料大成)寛平二年(八九〇)二月三十日の條には、三月三日の桃花餅のことが見えて、七草粥や端午の五色粽、七夕の索麵、十月の玄餅などとともに、俗間に由來する歳事だとしている。
- 桃に關わる傳承については、橋本循「桃の傳説について」支那學一の十一、大正十年、前川文夫「桃の信仰から見たモモの概念とその語源」自然と文化、一九五二年、などを参照。なお、小南一郎「桃の傳説」(光琳社「日本の文様二」一九七五年)は、この小論に吸収されているので、廢棄します。
- (5) 兵庫縣朝來郡朝來町多々良木の例。田中久夫『年中行事と民間信仰』弘文堂、一九八五年、三五五頁
- (6) 小南一郎『西王母と七夕傳承』平凡社、一九九一年、圖二八
- (7) 澤田瑞穂「蟠桃宮の神々」(『中國の民間信仰』工作舎、一九八二年)
- (8) 潘榮陸「帝京歲時紀勝」(北京古籍出版社排印本、一九八一年)
- 蟠桃宮在東便門內、河橋之南、曰太平宮、內奉金母列仙、歲之三月朔至初三日、都人治酌呼從、聯鑾飛鞚、遊覽於此、長堤縱馬、飛花箭灑綠楊坡、夾岸聯騎、醉酒人眠芳草地
- (9) 「大唐三藏取經詩話」入王母池之處第十一(『大倉文化財圖藏宋版大

唐三藏取經詩話』汲古書院、一九九七年)

- 猴行者曰、我師且行、前去五十里地、乃是西王母池、法師曰、汝曾到否、行者曰、我八百歲時、到此中偷桃喫了、至今二萬七千歲不曾來也、法師曰、願今日蟠桃結實、可偷三五個喫、猴行者曰、我因八百歲時偷喫十顆、被王母捉下、左肋判八百、右肋判三千鐵棒、配在花果山紫雲洞、至今肋下尙痛、我今定是不敢偷喫也
- (10) 澤田瑞穂『増補寶卷の研究』(國書刊行會、一九七五年)第二部、寶卷提要
- (11) 「宋書」禮志二  
自魏以後、但用三日、不以巳也  
上巳の起源やその行事については、勞幹「上巳考」(中央研究院民族學研究所集刊二九、一九七〇年)、宋兆麟「上巳節考」(中國歷史博物館館刊十三・十四、一九八九年)などのほか、論文が多い。
- (12) 「續漢書」(後漢書禮儀志上)  
是月上巳、官民皆繫於東流水上、曰洗濯、祓除去宿垢疾、爲大聚  
なお、「藝文類聚」卷四の引用では曰洗濯を、自洗濯に作る。
- (13) 「史記」外戚世家  
衛皇后、字子夫……武帝初即位、數歲無子、平陽主求諸良家子女十餘人、飾置家、武帝敕灑上還、因過平陽主、主見所侍美人、上弗說、既飲、謳者進、上望見、獨說衛子夫、是日武帝起更衣、子夫侍尙衣、軒中得幸
- (14) 吉川幸次郎「漢の武帝」(岩波新書、全集六)をも参照。  
「荊楚歲時記」(守屋美都雄『中國古歲時記の研究』帝國書院、一九六三年)
- (15) 三月三日、四民並出江渚池沼間、臨清流、爲流杯曲水之飲  
王羲之「蘭亭集序」(全晉文二六)

(16) 永和九年歲在癸丑、暮春之初、會於會稽山陰之蘭亭、修禊事也  
「韓詩章句」(太平御覽三〇、歲時廣記一八)

韓詩曰、湊與洧、方洧洧兮(洧洧盛貌也、謂三月桃花水下之時、至盛也)惟士與女、方秉蘭兮(秉執也、蘭蘭也、當此盛流之時、衆士與衆女、方秉蘭、拂除邪惡、鄭國之俗、三月上巳之辰、此兩水之上、招魂續魄、秉蘭草、拂除不祥、故詩人願所與悅者、俱往觀之)

(17) 中國古代の歌垣については、M・グラネ「古代中國の結婚習俗」(中國に關する社會學的研究(九篇))谷田孝之譯、朋友書店、一九九九年)、また同氏「中國古代の祭禮と歌謠」(内田智雄譯、平凡社、東洋文庫)を参照。

(18) 「搜神記」卷十六(御覽八八四、廣記三二六)

別後四年、三月三日、「盧」充臨水戲、忽見水旁有二牘車、乍沈乍浮……而充往開其車後戶、見崔氏女與三歲男共載

(19) 「春秋左氏傳」襄公二十九年

楚人使公親櫓、公患之、穆叔曰、祓禊而櫓、則布幣也、乃使巫以桃茢先祓禊、楚人弗禁、既而悔之

(20) 「禮記」檀弓下(明善堂重梓集說本)

君臨臣葬、以巫祝桃茢執戈、惡之也(陳澧集說…桃性辟惡、鬼神畏之、王莽惡高廟神靈、以桃湯灑其壁、茢、若帚也、所以除穢、巫執桃、祝執茢、小臣執戈、蓋爲其有凶邪之氣可惡、故以此三物辟祓之也)

(21) 「周禮」夏官、戎右

戎右……盟、則以玉敦辟盟、遂役之、贊牛耳桃茢

(22) 「雲夢睡虎地秦墓」文物出版社、一九八一年、圖一三三

人母故鬼攻不已、是刺鬼、以桃爲弓、牡棘爲矢、羽之鷄羽、見而射之、則已矣

(23) 「藝文類聚」卷八十六

本草經曰、梟桃在樹不落、殺百鬼

(24) 「馬王堆一號漢墓」文物出版社、一九七三年

(25) 柳洪亮「吐魯番阿斯塔那古墓群發現的「桃人木牌」」考古與文物一九八六年一期

(26) 「漢書」王莽傳中、顏師古注引服虔注

服虔曰、剛卯以正月卯日作佩之、長三尺、廣一寸、四方、或用五(玉)、或用金、或用桃、著革帶佩之

(27) 毫縣博物館「毫縣鳳凰臺一號漢墓清理簡報」考古一九七四年三期

(28) 「抱朴子」內篇十七、登涉篇(孫星衍校正本)

抱朴子曰、上五符、皆老君入山符也、以丹書桃板上、大書其文字、令彌滿板上、以著門戶上、及四方四隅、及所道側要處

(29) 「朝野僉載」卷五(中華書局排印本、一九七九年)

隋絳州夏縣樹提家、新造宅、欲移之、忽有蛇無數、從室中流出門外、其稠如箔上蠶、蓋地皆遍、時有一行客、云解符鎮、取桃枝四枚書符、繞宅四面釘之、蛇漸後退、符亦移就之、蛇入堂中心、有一孔、大如盆口、蛇入並盡、令煎湯一百斛灌之、經宿以鐵掘之、深尺、得古銅錢二十萬貫、因陳破鑄新錢、遂巨富、蛇乃是古銅之精

(30) 顧祿「清嘉錄」五月(上海古籍出版社排印本、一九八六年)

貼天師符、朔日、人家以道院所貽天師符貼廳事、以鎮惡、肅拜燒香、至六月朔、始焚而送之、有貽自梵氏者、亦多以紅黃白紙、用朱墨畫韋陀鎮凶、則非天師符矣、而小戶又多粘五色桃印綵符、每描畫姜太公、財神及聚寶盆、搖錢樹之類、受符者、必至院觀拈香、答以錢文、謂之符金

(31) 婁子匡「新年風俗志」(一九三五年、商務印書館、民俗民間文學影印資料三〇)

(32) 「荊楚歲時記」

造桃板著戶、謂之仙木、繪二神、貼戶左右、右神茶、左鬱壘、俗謂之門神、按莊周云、有掛鷄于戶、懸葦索於其上、插桃符於旁、百鬼畏之……應劭風俗通曰、黃帝書稱、上古時有神荼鬱壘兄弟二人、住

- (32) 度索山下桃樹、百蘭鬼、鬼妄擯人、援以葦索、執以食虎、于是縣官以臘除夕、飾桃人、垂葦索、畫虎于門、效前事也
- (33) 「大戴禮記」五帝德第六十二（四部叢刊本）  
孔子曰、顓頊、黃帝之孫、昌意之子也……乘龍而至四海、北至于幽陵、南至于交趾、西濟于流沙、東至于蟠木
- (34) 「太平御覽」卷九六七  
漢舊儀曰、山海經稱、蒼海之中、有度策之山、上有大桃木、蟠屈三千里、東北閼、百鬼所出入也、上有三神人、一曰神荼、二曰鬱壘、主領萬鬼、惡害之鬼、執以葦索、以食虎、黃帝乃立大桃人於門戶、畫神荼鬱壘與虎葦索、以禦鬼
- (35) 「論衡」訂鬼篇引用の「山海經」で、文字を改めたところがある。  
度索君のこと、二十卷本「搜神記」卷十七（太平廣記二九三）に見え、廟で祀られていたことが知られる。秋田成明「度朔山傳説考」支那學十一の三、一九四四年、も参照。
- (36) 「藝異傳」（藝文類聚八六、廣記三三五）  
譙郡夏侯文規、居京亡、後一年、見形還家……見庭中桃樹子熟、乃曰、此桃我昔所種、子甚美好、其婦曰、人言亡者畏桃、君何爲不畏、答曰、桃東南枝長二尺八寸向日者憎之、或亦不畏也
- (37) 「玄中記」（魯迅『古小說鈞沈』本）  
東南有桃都山、上有大樹、名曰桃都、枝相去三千里、上有一天鵲、日初出、光照此木、天鵲則鳴、群鵲皆隨之鳴、下有二神、左名隆、右名寔、並執葦索、伺不祥之鬼、得而箠之、今人正朝作兩桃人立門傍、以雄雞毛置索中、蓋遺象也
- (38) 「荆楚歲時記」の引用する「括地圖」も参照。  
宇宙樹とシャマニズムとの關係、宇宙樹と鳥との關係などについては、V・V・イワノフ、V・N・トポロフ『宇宙樹・神話・歴史記述』（北岡誠司譯、岩波現代選書、一九八三年）に詳しい。
- (39) 郭沫若「出土文物二三事」（文物一九七二年三期）、また同氏「桃都、女媧、加陵」（文物一九七三年一期）
- (40) 「太上洞淵神呪經」卷一誓願品（縮印本道藏第十冊、七四九七頁）  
玉京山上有一桃樹、桃高三百九億萬里、東枝覆東方、南枝蓋南國、西枝蔭西方、北枝蓋北國、四十九億萬年一花、八十億萬年結一子、子熟大如車輪、人一食之、三千年無飢也、鬼見此桃樹、則自死矣、天人各各持此桃木下、以殺疫鬼一切衆拜焉
- (41) 「元始上仙衆真記」（縮印本道藏第五冊、三三二二頁）  
元始天王在天中心之上、名曰玉京山、山中宮殿、並金玉飾之
- (42) 陶潛「桃花源記」（遼欽立校注『陶淵明集』中華書局、一九七九年）  
晉太元中、武陵人、捕魚爲業、緣溪行、忘路之遠近、忽逢桃花林夾岸、數百步中無雜樹、芳華鮮美、落英繽紛、漁人甚異之、復前行、欲窮其林、林盡水源、便得一山、山有小口、髣髴若有光、便捨船從口入、初極狹、纔通人、復行數十步、豁然開朗
- (43) 「神仙記」（太平廣記六一、天台二女。太平御覽九六七は、幽明錄として引用する）  
劉晨、阮肇、入天台採藥、遠不得返、經十三日餓、遙望山上有桃樹子熟、遂躋險援葛至其下、噉數枚、餓止體充、欲下山、以杯取水、見蕪菁葉流下、甚鮮妍、復有一杯流下、有胡麻飯焉、乃相謂曰、此近人矣、遂渡山、出一大溪、溪邊有二女子、色甚美、見二人持盃、便笑曰、劉阮二郎捉向杯來、劉阮驚、二女欣然如舊相識、曰、來何晚耶
- (44) 周一平、沈茶英編『歲時紀時辭典』湖南出版社、一九九一年
- (45) 趙康民『驪山風物趣話』陝西旅遊出版社、一九九二年。また、喬繼堂、朱瑞平編『中國歲時節令辭典』中國社會科學出版社、一九九八年、も参照。